国見岳救助 GPS活躍

8月男性不明 ボランティアグループ活用

ルート記録 未捜索地絞り込み

8月、八代市泉町の国見岳（1739㍍）で熊本市の男性が行方不明になり、6日後にボランティアグループに発見されて九死に一生を得た。捜索が難航する中、発見のきっかけとなったのは、衛星利用測位システム（GPS）で捜索済みのルートを収集し、未捜索地を絞り込む手法。ボランティアグループは検証会を開き、今後の活用を提案している。

行方不明者の捜索について報告があった事後検証会＝9日、美里町

「今回は、行方不明になった男性の家族が交流サイト（SNS）で捜索への協力を広く呼びかけたこともあり、九州各県から多くの捜索ボランティアが現地入りした」。自らも捜索に加わった山都町の山岳ガイド、寺崎彰さん(64)は振り返る。

しかし、捜索本部はボランティアの参加を想定しておらず、山中はスマートフォンの電波が届きにくく連絡もままならない。このためボランティア同士や消防、警察との連携が図れず、同じ場所を複数のグループが探すなど、効率が悪い面があったという。

寺崎さんらは9月9日、こうした問題点を洗い出し今後に役立てようと、美里町の交流体験施設かじかで事後検証会を開催。捜索に参加したボランティアや、登山地図アプリの開発会社など17人が集まった。

参加者が「有用だった」と評価した一つが、GPSデータを生かした捜索マップの情報共有だ。

寺崎さんらは、最近の登山者がスマホのGPS機能と登山地図アプリを組み合わせて、自分が歩いたルートを記録する点に着目した。行方不明から4日後、ボランティアに呼びかけて捜索済みルートの記録を収集。地図上にルートを集約すると、国見岳から五勇山（1662㍍）を結ぶ尾根の東、宮崎県側に、未捜索地が浮かび上がった。さらに2日後、未捜索地に入ったグループの一つが男性を発見、救助した。

男性を見つけた3人グループの1人、崇城大助教の河野和博さん(52)＝益城町＝は「このマップがなければ、五勇山方面は捜索しなかっただろう」と話す。3人グループだったため、ロープを使って傾斜地を進み、2手に分かれてスマホで通話できる場所を探してヘリを要請するなど、スムーズに救助できたという。

検証会では、こうした経緯を総合し、「ボランティアセンター」を設けて、情報と連絡の一元化や捜索グループの編成、消防・警察との連携を図るべきだと確認した。寺崎さんは「検証結果を基に近く提言をまとめ、行政機関に提出したい」と話している。（鹿本成人）

2022年9月23日　熊本日日新聞　P.31